

●晴天にめぐまれて鉄の音軽し月桂樹ひと本樹形ととのふ

丸山弘子

「月桂樹」が一連タイトル。さいしよの歌は「雨晴れて」で始まっているこんな歌、

雨晴れてつねより鶉ひよの声透る若鳥らしき三羽ほど居り

晴れつづき。まず鶉の声からつねより透るといふ気付き、そこから若鳥らしき（三羽ほど）と展開される。月桂樹の歌でも、軽快な鉄の音から始まって一つの納得がやってくるようだ。丁寧なものいい。三、四首目では視覚に傾き（つはぶきの花、黄花菖蒲）、五首目では、それに人の姿が射す。そのあとでじぶんを詠う。作者像は明白だ。

いかほどの効果ありしや白内障を遅らせるとふ目薬をさす

●わたつみの青きはてよりひしひしと水惑星の力うち寄す

結城 文

号末の短信から、作者は、三週間ほどかけてエチオピア、モザンビーク、南アフリカ、ボツワナとアフリカを回ってきたらしい。移動にはヘリコプター、セスナ機、プロペラ機、と使う。そこがまずもって格別な旅だ。うたは「モザンビークの海」と題する一連、その二首目。「ヘリコプターに見下す海」（二首目）とあるので、鳥瞰する景。

空間が拡張された臨場感がある。エネルギーを感じている。次の歌にもあるが、輪郭の大きさが感じられる。

光増す頭上の半月暗き海の一つ灯りを見つつ食事す

●すりへりし母の軽石使いつつかかと擦りぬ今年の冬は

池田桂一

タイトル「北上行その後」通り、前半は沿線、トンネル、ホテル、といった言葉があるように、北上行きが詠われていて、その目的は「明日また文学館を尋ねんと思う」（四首目）というところだろうか。順直に詠む。その後の歌になる。

母親と風呂に入っていた頃は大体からだを洗ってもらっていた。風呂場には軽石が置いてあって、それをこどものじぶんはめでみていた。そのじぶんももう踵が乾きがちで、ひび割れてもいる。足を大事にしていられる暮しでもなかったろう。すりへりし、に思うものはあるはずだ。

●いいことをしたわねと言ふ婦人あれば動物病院にわが息ととのふ

布宮慈子

山越えのみち（車）で仔猫を拾う。仔猫は前足を咬まれたのか、腫らしている。折れてはいない（獣医師）。一つだけ開いていた動物病院でのやりとりがこの歌。切迫した心遣いがみえるような文体でもある。このあとの経過もある。

「二夜かがやく」がなかなか詠えないところ。束の間足元の濃密さ、それも含めて。

長き尾をたてて仔猫は付き来たり部屋から部屋へ尻尾はアンテナ
拾ひ猫もらはれゆけば足元の涼しくなりて二夜かがやく

● 吾がそばに在わす思いに抛りゆくは歌集『紅』にてそを開きたり 市川茂子
 自分のそばにいらっしやる気がして抛り所として頼るのは歌集『紅』なので、それを開いてみた、という。『紅』は布宮みつこの歌集。叔母・みつこは生前、作者と二人で勉強会をしていたようだ。作者はみつこを「先生」と呼んでいた。急逝から十二年過ぎて、悲しみや寂しさはいっそう深くなっている。

歌稿持ち逢いにゆきたる喫茶店よみがえりくる遥かなる日よ

● 電柱のはり紙禁止（県警）は張り紙にして字の大きさに紙の小ささ 小野澤繁雄

ある、ある！ との発見を歌にするのは意外に難しい。花山多佳子に秀逸な一首がある。「爪楊枝のはじめの一本抜かんとし集団的な抵抗に会ふ」（『晴れ・風あり』）。掲出歌は「はり紙禁止（県警）」も張り紙でしょ？ というツッコミを事実だけで述べている。二句目の字余りも気にならない。さらに、小さい紙に書かれたデカイ文字。この駄目押しも、権力をもつものの態度を妙に納得させてくれる。

● 入口のテントの中の受付に住所と氏名と本人確認 河村郁子

今どきの運動会、見学するには手続きが必要。多くの人に来てほしいが、誰かわからない人はお断りという学校側の微妙な心理が見え隠れする。始まれば楽しさ満載の運動会だ。ふだん子どもと接することが少ない父親も何かを手には持てば居場所もあるというもの。客観視しながら、明るい持ち味が出ている。

身のまはりデジカメ、スマホにiPadしつかり構へる子育てパパたち

● 天気予報の誤算うれしき秋日和 谷垣満壽子

予報が当たらなくてよかったと、秋のよく晴れた天気を喜んでいる。次は、身体性の感じられる句だ。「さつとみて」は新鮮なものを選ぶ目や賢しさなど、あまりいいイメージではない。が、「黄なる唇」の鮮やかさが、人は所詮ものを食って生きているのだと納得できるのではないか。が、「黄さつとみて黄なる唇もつ秋刀魚買ふ」

● 釣瓶落し木彫りの蠅の動き出す 新野祐子

「瑞龍院にて二句」の詞書あり。瑞龍院は山形県白鷹町にある寺。江戸末期の建築で意匠的技術に優れ、地方棟梁・木彫師の技量を知る上で貴重なものだという。蠅は、水中に棲み人に危害を与えらるという伝説上の怪物。「動き出す」の迫力。次の麒麟は、中国神話に現れる伝説上の霊獣。巨大な麒麟と季語の「小鳥来る」の対比がいい。なお、作者は今号から現代仮名遣いを用いている。

麒麟彫る腕たおやか小鳥来る